来訪を告げるチャイムが鳴った。視線をあげた新川志保は、マイセンのティーカップを皿に戻した。ふちどりが波うつデザインで、透き通るような白に青い絵柄のカップは志保のお気に入りだ。

玄関に向かい、玄関ドアを開けた。宮田早苗が若い男にくびれた腰を抱かれて立っていた。男の名前は、遠藤剛太。息子の同級生だ。そして宮田早苗は、息子の担任教師だった。早苗の目鼻立ちの整った美しい顔に羞恥の色がありありと見てとれる。

「志保、もうここはこんなにびんびんだぜ」

剛太は女教師の細腰を解放すると、玄関を無造作に上がり、志保の尻をいきなり撫でてきた。そして股間の高ぶりを露骨に見せつけて

きた。

「あなた、玄関でいきなりなのね。さかりのついた獣みたいだわ」

志保は素直にフレアスカートの尻を息子の同級生にあずけた。

「さかりのついた獣は、このむっちりとした熟れ尻を早くいじめたくてさ」

志保の美しい顔がのけぞった。剛太の指がスカートの上から双臀の狭間に潜り込んだのだ。

「わたしのお尻、そんなにいいの？」

志保は気品のある美しい顔に妖艶な表情を溶けさせ、アナルゾーンを素直に触られている。

「熟れぐあいといい、感度といい極上の尻だよな。それに味もいいんだぜ」

剛太の指がアヌスを揉み込んでくる。

「わたし･･･すっかり調教されたわ･･･お尻を責められてはしたなく濡らす女になってしまったわ･･･後ろめたさと快楽の板挟み･･･」
ひきつった笑みを浮かべた志保はまた切なげな表情に戻り、豊かな臀部を妖しくくねらせた。
「快楽に溺れた未亡人の尻だよな」
剛太が尻肉を叩いた。弾力感に富んだ尻肉だ。
「あー」
志保は臀丘を突き出したまま、のけぞった。

　リビングでは鬼島悦雄がソファに座っており、煙草をくゆらせながらビールを飲んでいる。色白の華奢な体格の美少女が隣に正座して酌をしていた。リビングのテーブルに大型

の浣腸器が転がっている。隣に置かれた洗面器には液体がなみなみと入っていた。

「宮田先生、今夜はオールナイトで楽しもうぜ」

煙草を灰皿に押しつけた悦雄は立ち上がると、宮田早苗の腰を両手ではさみつけるように抱き、おどけた調子でステップを踏みだした。悦雄の股間がぐりぐりと押しつけられてくる。やがて腰に回された両手は早苗の臀部をさすり始めた。早苗の顔に赤みが差す。

　女教師は口を吸われた。煙草の匂いが鼻腔を刺激する。隣では、新川志保が同じように剛太に抱かれ、口を吸われていた。

「ストリップ！」

早苗は悦雄に尻を強く叩かれた。

「鬼島君、わたし･･･心が壊れそうだわ。教師なのに･･･教師なのに生徒に弄ばれるなんて･･･最低の･･･情けない教師よ」

「あんたの心はそう簡単には壊れないさ。先生はマゾの気質が濃いからな。いじめられて悦ぶ女なのさ」

「いいえ･･･違うわ･･･情けない気持ちでいっぱい･･･」

早苗は恨めしそうに鬼島悦雄を見つめると、首を弱々しく振り、

「そうよね。マゾだわ」

とうつむいた。

「ストリップするわ」

その場で衣服を脱ぎだした。腰をくねらせて脱ぐ仕草からこれまでにも何度もストリップ

をさせられてきたことが分かる。女教師は下着を一切着けていなかった。

　全裸で立たされた早苗は、顔がかっと熱くなった。一人素っ裸で見世物になっている。猛烈な羞恥心が胸を締めつけてくる。志保もソファに座り、早苗を眺めているのだ。

「剥き身！」

剛太が薄笑いを浮かべながら命令してきた。

「ああー恥ずかしい･･･」

早苗の声が震えている。

「ざっくりと先生の女を見せろよ。奥の奥までな」

悦雄も笑みを浮かべている。

「いきなりひどいことさせるのね･･･かわいそうだわ」

そう言う志保だが、全裸の女教師を見つめる視線ははずさない。美しい裸体を凝視しているのだ。

　艶やかな漆黒の翳りが飾る股間に早苗は両手をそえた。足を開き、指で恥部を左右に開くと、美しい顔を横にさっとそむけた。唇を噛んでいるその顔は猛烈な羞恥に染まっている。。

「おい、濡れているじゃないか。先生、どうしてそんなに濡らしているんだい？」

悦雄がぐいっとグラスのビールを飲み干すと、隣の美少女が黙って酌をする。

「もう･･･知っているでしょ･･･あなたたちに厳しく調教されてマゾになったからよ。もうわたし･･･教師失格」

二人の若い暴君を交互に見た早苗は、ふたたび美しい顔をそむけ、かすれ声でそう言った。まだ恥部を左右に広げたままだ。薄いピンク色の粘膜は実際しとどに濡れており、膣口から甘露があふれているのだ。